



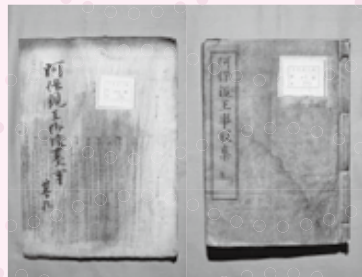
▲後円部の阿保親王「御石槨」と考えられた巨石（「大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第五輯」1934年）



▲図面にある西大塚から河内大塚山古墳へ入る石橋と昭和7年の宮内省の石碑（西大塚1丁目）



▲『御廟詮議』に付けられた別紙図面の河内大塚山古墳



▲『阿保親王御廟詮議』（左）と『阿保親王事取集』の表紙（右）（山口県文書館蔵）

長州藩の『阿保親王御廟詮議』 『阿保親王事取集』の調査記録

江戸時代、河内大塚山古墳が阿保親王の墓ではないかと考えられていました。阿保親王は平安時代の延暦十一年（七九二）、五二代平城天皇の第一皇子として生まれました。ですから、二五〇年ほど前、六世紀中頃の巨大前方後円墳の河内大塚山古墳を墓だと信じるのは、今では考えられません。しかし、江戸時代には阿保親王が大塚山に隣接する阿保村に別宅を構えていたという伝承から、皇族の親王墓なら、近くで巨大な墓を造つたのではないかと考えられたのです。

阿保親王を始祖とする長州藩（山口県）の藩主毛利氏は、江戸時代、京都や芦屋（兵庫県）に所在する阿保親王の墓と伝えられていた候補地と共に、河内大塚山古墳にも家臣を派遣して、墓所確定を進めました（「歴史ウォーク」³²¹）。

文政元年（一八一八）五月二十一日、長州藩士の村田清風は大塚山を大塚村の庄屋治兵衛の案内で、墳丘内に入って聞き取り調査を行いました。この時の様子は、文政七年（一八二四）に『阿保親王御廟詮議』、翌文政八年（一八二五）には『阿保親王事取集』としてまとめられました。

『御廟詮議』では、清風は治兵衛に大塚山と親王墓との関わりを尋ねました。治兵衛は「伝承はあるが、村に古くから伝わる文書はありません。ただ、

江戸幕府には親王墓と報告し、税が課せられない御除地となっております」と答えています。

清風は、当時、墳丘後円部に鎮座していた天満宮を参拝し、祭神の菅原道真を表す梅鉢がついた石燈籠を見学しました。また、少し下った中腹に横穴式石室と思われる「御石槨」も露出していると記し、別に図面も付けています。

同図は、元禄十年（一六九七）十一月十三日に書かれたものを、治兵衛が持参し、これを、清風が模写しました。もともとは、西大塚村から大坂町奉行所に差し出したものです。

図面は「河内国羽喰庄大塚山阿保親王御墓図」と題し、西大塚村、東大塚村、阿保村を表記し、濠に囲まれた墳丘が描かれています。後円部のみが「阿保親王御墓」とあります。前方部は、東西大塚村の平地や畑と共に東大塚村の屋敷が描かれ、集落が形成されていたことがわかります。東西大塚村の村道や石橋（渡り土手）も見られます。

後円部の様子を図面から読みとると、墳丘東側のやや下方に半円状の巨石を描き、「長サ二間、横一間ほどの石が有り、阿保親王の御石槨と申す」と記されています。この石槨が親王の墓室と信じられていたのです。

次に、『阿保親王事取集』の記述を紹介します。同集は、もともと寛政九年（一七九七）二月七日に、井上惣兵衛なる者から清風に見せられた記録を、文政八年に写したものです。親

王の墓であることを簡条書にしています。抜粋して、紹介します。

「大塚山は）河内国丹南郡秋元但馬守様の御領にて、阿保一品親王様の御廟で、およそ次の通りです」

「一、大塚山より三丁ほど前（北）に阿保村という所が有り、親王様の御住所であり、御宮居があつた旧跡です。ただ、今では（寛政九年当時）空地になっていました」

「一、阿保村と大塚村との間には大きな池があり、親王池とよんでいます」
「一、池（大塚山を囲む濠）は堀となり、その内に山があります。山は大塚山と申し、親王様の御廟の山といわれています」
「一、御廟と伝わるけれども、玉垣など何もなく、野原となっています。このため、今では御廟の近所へは誰も参拝しません」

「御廟は、親王が亡くなった承和九年（八四二）ごろ建立されたので、昔のことで村人も知らないことは無理からぬことです」
文中では、親王池・阿保村別宅も読みとれます。現在、大塚山古墳は宮内庁の管理となり、中に入ることができません。しかし、江戸時代の両資料から、親王御廟と信じられていた古墳の様相や村人の動向がわかり、興味を持たれます。考古学・文化財としての古墳と共に、人々の記憶の中に生き続ける大塚山にこれからも注目していきたいと思ひます。